



## 所長の部屋



### 今さら聞けない病気の常識 : ⑦ 結核

京都府南丹保健所長 時田 和彦

結核は古くて新しい病気です。統計が取られるようになった明治以降、昭和の中頃までの日本では、結核が蔓延していました。その後次第に患者が減りましたが、2019年の統計では人口10万人あたりの新規患者数が11.5人となっており、日本はいまだに結核中蔓延国です。世界的には、全人類の3分の1が結核に感染したとされており、アフリカや東南アジアなどでは現在も流行しています。

結核にかかると、咳・痰(ときに血痰)・胸痛・発熱・全身倦怠感などの症状が続きます。長引く風邪症状は要注意です。高齢者では、元気がない、食欲がなく体重が減る、などの症状のみの人も多く、発見が遅れがちで、老人施設での集団感染の一因となっています。肺炎の治りが悪く、後に肺結核の合併が判明することもあります。

結核の頻度が高く注意が必要なのは、高齢者に加えて、外国人(前述の地域)や免疫低下者(エイズ患者、関節リウマチなどで免疫を強く抑制する薬の使用者を含む)、生活困窮者、医療関係者などです。また田舎より都会の人、既婚者より独身の方が、罹患率が高くなります。結核感染者と長時間接触していた人も要注意です。

これらの人に上記症状が続く場合は、医療機関を受診し、喀痰・X線・採血等の検査を受けてください。診断が確定したら、菌を痰などと共に体外に排出している場合は、専門病棟に入院します。排菌していない場合は自宅からの通院治療が可能です。薬は3~4種類を数ヶ月間使用する必要があります。

結核にかかると、周囲の家族等に感染させてしまう危険があります。治療が不確実だと、薬剤耐性菌が出来て、その後の治療が困難になります。治療を受ける際は医師の指示に従い、しっかり服薬して完治させることが大切です。また結核患者と濃厚接触した人は、保健所の指示に従い、しっかり検査を受けてください。